

第 84 回全国研究大会 開催校による統一論題解題

大会実行委員長 栗屋仁美
実行委員 佐竹恒彦 平屋伸洋

日本マネジメント学会第 84 回全国研究大会の統一論題テーマは、「資本主義社会とマネジメント—サステナビリティの全体最適と個別最適—」です。

2020 年からのコロナ禍により我々は、産業革命以来、成長を目的としてきた経済活動や日常を、今一度立ち止まって熟考する機会を得ました。在宅勤務などの働き方改革はもちろん、「ブルシット・ジョブ」なる言葉も生じ、企業が成長するために必要と信じて構築してきたビジネスモデルについても再考の時を迎えているといえます。資本主義制度に疑問を呈し一時期一世を風靡したマルクス経済学が改めて見直されていることも、その証左でしょう。

しかし、どのような時代や状況でも普遍的かつ最重要とされるのは、サステナブルであることではないでしょうか。今回の統一論題テーマである「サステナビリティ」とは、環境保全等の社会性にのみ限定されるものではなく、万物一般の持続性を意図しており、経営学全般にわたってサステナビリティを議論しようとするものです。というのも、経営戦略、事業戦略やマーケティングは、企業の存続、すなわちサステナビリティを目的とした利潤創出のために計画されるものであり、組織制度や人的資源管理、コーポレートガバナンスやファイナンス等もまた、それを具現化するために必要な学問であるからです。企業の価値観を示す経営理念や CSR に留意した経営行動が重要とされることも、サステナブルであろうとすることにほかなりません。したがってサステナビリティは、経営学にとってその根幹をなすものとも言えます。

さらに、企業経営は資本主義社会システムの中で遂行されますが、経済のグローバル化、成熟化、多様化等の促進に伴って新たに生じた「市場の失敗」は、企業経営の目的がサステナビリティであることを再認識させ、議論することの必要性を我々に示してくれます。議論においては、サブテーマで示した全体最適と個別最適への配慮もポイントとなるでしょう。企業と社会のサステナビリティは同一なのか、差異はあるのか、企業はサステナビリティにおいてどれくらいの期間を想定し、どのようにマネジメントすればよいのか等を検討することが期待されます。

万物が諸行無常であるとはいえ、資本主義社会もまた永遠でないと明言するには躊躇します。そこで新型コロナウイルスと共に我々の新たな価値観を構築できるこの時期に、企業経営のサステナビリティのあり方とは何か、どのような社会を前提に企業経営を進めていくのかを、経営学の多様な領域よりアプローチしたく、本学会の統一論題を課題提起しました。

オンラインであります、学会員の皆さまと「資本主義社会とマネジメント—サステナビリティの全体最適と個別最適—」について議論し、日本マネジメント学会の活性化に寄与できますことを祈念しています。